

緋弾のアリア Reversi

長財布

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

狙撃科の問題児、茨木レオのもとに転校生が現れた。

名前は鷺宮エリー、超人的な推理力、観察力、洞察力の持ち主でシャーロック・ホームズが嫌いなイギリス人。そんな二人の武偵校での学園生活の物語。

吟味 感知 聽取 邇逅

目

次

14 10 6 1

邂逅

「またお前か、茨木レオ・・・」

尋問科担当の綴先生はため息を吐きながら俺の前に座った。ここは東京武蔵高校の生徒指導室、自慢ではないが俺はこここの常連だ。「報告書を読む必要もねエ、どうせまた命令違反だろ?」

「そうですね」

俺は答える。綴先生はさつきより大きなため息と共に紫煙を吐き出した。



『狙撃班村上、配置完了』

『坂本、準備完了です』

『牧田、いつでもいけます』

『茨木、大丈夫です』

俺は皆と共にインカムで狙撃の態勢が整つたことを報告する。およそ500メートル先にある銀行の建物に向けて愛銃であるK ar 98 aを構えた。

平日の白昼に起きた立てこもり事件、犯人は銃で脅し金を要求、中の客と従業員を人質に銀行内に立てこもっているのだ。

店舗はガラス張りなのだがブラインドが降ろされ中の様子は見えない、今情報科の生徒たちが必死に犯人との交渉を行つていてが進展はない。

「ん、なんだ?」

すると突如としてブラインドが上がり始める。このままでは内部が丸見えになつてしまふ。狙撃班からしたら犯人を無力化できるチャンスだと思つただろう。

しかしそう甘くはなかつた。

『これは・・・』

『マズいぞ』

『最悪だ・・・』

文字通りの肉壁だつた。犯人は人質を窓際に一列に並べ、盾にしていたのだ。その中には子供や老人もいた。

「血も涙もねえヤツだな・・・」

人質の後ろに犯人が銃を向けている、公開処刑も一緒にできるつて訳か・・・

『狙撃班！誰か対応できる者は居るか!?』

指揮を執る情報科の一人が無線で問う。

『無理です、対象の体が人質でほぼ隠れています。狙撃は危険です！』
『撃てないことは無いですが9条に抵触してしまいます・・・』

次々と聞こえてくる無線に俺は苛立っていた。何が9条だ、人質の命が優先だろうが・・・

『各員、指示あるまで待機せよ』

マジか・・・

俺は絶句した。そんな悠長な事やつてる場合じゃねえってのに。
そして嫌な予感がした。俺が今ここで撃たないと最悪の事態になる、そして俺の人生

経験からこの予感は大体当たる・・・

「狙撃班茨木、制圧します」

そう言つて引き金に指をかけた。スコープのクロスラインはしつかりと男の頭部を捉えている。

『待て茨木！不確定要素が多くすぎる。待機だ！待――』

俺は引き金をゆっくりと引いた。



「非殺傷弾です」

俺の言葉で綴先生は面倒くさそうに頭を搔いた。

撃つたのは訓練でも使用されるゴムスタンと呼ばれる非殺傷弾

だつた。その証拠に弾丸は狙い通り頭部に被弾したが脳震盪を起こしただけだつた。そこに俺が突入命令を下し強襲科が突入、無事犯人を無力化することができた。

後から分かつたことだが犯人の男は事件当時薬物による極度の錯乱状態であつたらしい。交渉が難航するのも当然だつた。

「あのなあ・・・非殺傷弾とはいえ一応は実弾なんだぞ、当りどころによつては死ぬ可能性だつてある。それに入質に当たつたらどうする？ゴムスタンは空気抵抗や風の影響を受け易い、入質に当たつてたら大騒動だ。ただでさえ今武僧への風当たりが強いつてのに・・・」「当たらないと思つてたら撃つてません」

飄々と返す俺に苛立つ綴先生は2本目のタバコに火を点ける。紫煙を燻らせながら彼女は俺に1枚の紙を渡した。

「情報科がシミュレートした資料だ。お前があのタイミングで撃つてヤツを無力化できた確率は17%だとよ」

「その数字は下方修正されます、肝心なところで手柄を取られた俺へのあてつけでしょう」

「・・・」

綴先生はしばらく黙つた後立ち上がつた。これ以上埒が明かないとでも思つたのだろう。

「今回も結果が結果だけに厳重注意しかできないがこれだけは覚えとけ、お前のやり方は危険すぎる。いつか取り返しの付かないことになるぞ」

「・・・肝に銘じて置きます」

これもお決まりのやり取りになりつつあり、綴先生は俺の返事を待たずして生徒指導室から出ていった。

太陽もすっかり傾いてしまい下校時間はとつくに過ぎてしまつていた。残つて いる生徒もほぼ居ない、俺もさつさと寮へ帰ろうと校門に向かおうとした時だつた。

「（）に居ればキミに逢えるつて聞いてたけど本当だつたんだね」ふと背後から声をかけられた。振り返ると一人の女子生徒が立っていた。

髪は腰まで届くかというほどのキレイなくせつ毛の無いブロンド、目鼻立ちのくつきりした顔立ちと女子にしては高い身長で痩身、明らかに欧州系だ。それに真っ白な肌と上品な佇まいはまるで人形のようだ。

「アンタは誰だ？」

スカーフからして同級生、だが知らない顔だつた。

「人に名前を聞くときは自分から名乗るのがマナーじゃないのかい？」

「俺を待つてたかのような言い方して名前を知らないわけがないだろうが……」

「正解、私はキミを知ってる。私は鷺宮エリー、よろしく」

エリーは俺に右手を差し出す。一応その右手を握つておいた。

転校生か……でもこんな時期にどこから？

その疑問は彼女の襟を見たらわかつた。4つの旗、ライオンとユニコーン、イギリスの紋章だ。しかもその下にもう一つピンバッジをつけている。おそらく家紋、名家の出だろう。

イギリスの貴族が多く通う武蔵校といえどロンドン武蔵校。少し前に似たような転校生が居たから覚えていた。

「大方キミの予想通りだよ、茨木レオ君」

「俺の目線ですべてを察したのか？さすがホームズの国だな」

するとエリーは不機嫌な表情を見せる。

「その名前はあまり好きじゃないんだ。できれば私の前でその名前を出すことを控えてもらえると嬉しいかな……」

「それは悪かつたよ」

一応謝つておいた。

シャーロック・ホームズは現代武蔵制度の祖となる人物だ。イギリス人で武蔵なら彼は神様のようなもの、憧れの存在だとばかり思つていたのだが、珍しいな。

「さて、お返しにキミについて話そう」

彼女はズイッと俺に近寄る。互いの鼻が当たつてしまうのではないかと思う距離に俺は反射的に上体を仰け反らせてしまう。

「名前は茨木レオ、専攻は狙撃科、使っている銃は古いボルトアクション式のライフル、地面に伏せる姿勢じゃなくて座つた状態で撃つスタイルのようだね。生徒指導室から出てきたことからなにかやらかして指導を受けていだ、でも出てくる時間が早いのと荷物が少ないところから軽い処分だつた。担当したのは尋問科の綴梅子先生、彼女の吸う独特なタバコの匂いが付いてる。そしてキミはこれから学校を出すぐのローソンで晩御飯を買おうと思つてた。支払いは口座直結のデビットカード、スマホでPoint aカードの提示も欠かさない。どう?当たつているかな?」

「…」

耳元でマシンガンのように次から次へと俺のことを言い当てるエリ。俺は彼女の超人的な観察力、推理力に言葉が出なかつた。

おそらく事前に仕入れていた情報は名前だけ。持つている銃と射撃姿勢は指の傷と服の皺、コンビニのことは生徒指導室を出てすぐスマホでポイントカードのアプリを開いたから、その画面と手帳型スマホケースに入れてあるカードから推測しだのだろう。

「アンタがどんなヤツかはわかつた。それで?俺になにの用だ?」

わからない事はそこだつた。転校生がいきなり俺に話しかける意図がどうしてもわからなかつた。

彼女は俺の両手を握つて言つた。

「私と付き合つて」

聴取

「はあ？」

突然の告白に素つ頓狂な声を上げる俺。

「キミもそんな表情をするんだね、言い方を変えよう、私とコンビを組んでくれないかい？」

「ああ、そういう事か・・・」

茶目つ氣を含んだ笑みを見せるエリーに俺は内心安堵していた。
「でもなんで俺なんだ？」

「報告書を読んだんだよ。例の立てこもり事件のね」

エリーは紙の束を見せた。さつき生徒指導室で綴先生が見ていた資料と同じものだ。

「不謹慎に思うかもしれないけどあの事件、私は最悪な結果で終わると思つてた。でも結果は違つた。キミが犯人を制圧したお蔭で一人の死者も出ることなく事件は解決した。正直驚いたよ、私の予想をこうも鮮やかに裏切ってくれる人が日本に居たなんて思いもしなかつた」

若干興奮気味の口調でエリーは続ける。

「私はある事件を追つて日本まで来たんだ。それは曾祖父の代から続く因縁も絡んだ大事件でね、それを解決するために協力してほしい、もちろん報酬も弾むし単位を与えるよう教務課に掛け合つてきたよ。

お互いwin-winで行こう」



俺は彼女の要請を受けることにした。金の為じやない、正直言つて俺の今までの所業から後難度クエストと一緒に受けてくれる人間はあまり居ない。

それに彼女の追う大事件というのも気になっていた。そして何度も言うが金の為ではない、断じて。

コンビを組むに当たつてまずはエリーザの部屋へと案内された。東京タワーの足元、芝公園近くのマンションにだつた。外観を見ただけで高級マンションだとわかる。

エレベーターが階数ボタンを押すんじやなくてカードをかざすと自分の部屋の階に止まるタイプのもの、ガチなヤツだ・・・

「さあ、狭い部屋で申し訳ないが入つてくれ」

「いや、ひとり暮らしするには十分すぎるだろ・・・」

まるで高級ホテルの一室のように高そうな装飾品であしらわれたエリーザの部屋だが彼女の自室であろう部屋だけ雰囲気が違つていた。壁一面に貼られた資料、座り心地が良さそうなふかふかのソファの周囲には何やら難しそうな本がうず高く積まれている。

俺はその資料のいくつかを手にとつた。

「クルマ、船、バイク、自転車、バスのハイジャック・・・もしかしてお前がおつてている事件つて武偵殺しの事なのか？」

武偵殺し――

最近武偵業界を騒がせている腕の立つ武偵ばかりを狙つた殺人事件だ。つい最近も武偵校生徒を狙つたチャリジャック、バスジャックがあつたばかりだつた。

「50点、私が追つてている事件はもつと大きい存在、彼らを裏で操つている奴らだよ」

「裏で操つてる？」

「武偵殺しだけじやない、私の予想では何人もの犯罪者に資金、武器、戸籍、知識を提供している組織があると思つていて」

「もしかしてお前、一人でバカでかい闇の組織みないな奴らに力チコミキメようとしてんのか？」

「そうだよ？」

私なにかおかしいことを言いましたか？みたいな感じで返すエリーザを見てマジかと思つた。

だが乗りかかった船だ、報酬と単位のこともあるし地獄の2丁目ま

で付き合つてやろうと思つてしまつた。



「・・・あれ？」

休日の朝、俺は部屋から聞こえる物音で目を覚ました。部屋には俺以外誰も居ないハズなのだが。

リビングに向かうとキッチンに人の気配がした。

「おはよう、朝は紅茶で良いかな？」

なんかエリーがいるんだが・・・

「なんで居る？」

「今日はある人物に会いに行こうと思つてね、迎えに来たんだ」

「いや、それはお前がキッチンでメシ作つてる答えにはなつてないぞ」
エリーはゴミ箱を指さした。

「キミ、食事はいつもコンビニ弁当だろう？私とコンビを組むな常に最良のコンディションを維持してもらわないと困る。ほらできた」「おう、さんきゅー」

久々の手料理を堪能した後、俺達は武偵校のある学園島へと向かう、彼女のジヤガーキャンプを運転しながら・・・
こんなスーパーカー初めて運転したぞ。

「なんでこんなバカ高そうなクルマ持つてきてるんだ？」
「移動手段があつた方が便利だろ？」

にしてももつと他にクルマあつただろうに・・・

イギリスのスーパーカーでしばしの首都高ドライブ、しかし目的地の武偵病院に近づくにつれてエリーの表情がどんどん曇つていく。
「どうした？醉つたか？」

「いや、私から誘つておいて何だけど、これから会う人物は個人的にはあまり会いたい人物じゃないんだ。だからキミにも来てもらおうと思つたんだけど・・・いざ会うとなると・・・」

「へえー、お前もそういうコトあるんだな」

「私だつて人間だよ？合う人間合わない人間だつているさ。それに彼女は、私の家とかなり確執がある家系でね、あまり気乗りしないんだ・・・」

レインボーブリッジが見えてきた当たりから彼女の顔色はどんどん悪くなつていく、それは本当に心配になつてくるほどに。

「本気で大丈夫か？なんなら日を改めても・・・」

「いや、いまじやないとダメなんだ。そうでないと手遅れになつてしまふ」

俺の提案をエリーは即座に拒否した。

そうまでして事件の情報を集めるとは、さすがの信念だ。

学園島インターチェンジを降りて東京武蔵高校付属病院へ到着した。中へと入りエレベーターで個室病室へと向かう、入り口に掛けてあつた名前には

『神崎・H・アリア』

とあつた。

感知

「へえー、まさか私の他にも武偵殺しの捜査をしてる人がいたなんてね・・・」

病床で資料を読み漁る神崎・H・アリア、彼女もまた武偵殺しの事件を追つて遙々ロンドンから東京にやってきたのだ。

ちなみにエリーはアリアのことを知っているようだがアリア本人はエリーのことを知らない様子だつた。

「正確には武偵殺しを操つてる黒幕だけどね」

エリーが答える。彼女は終始複雑そうな表情だつた。

「だから武偵殺しについて知つてゐる事を教えてほしいんだ。どんな小さいことでも構わない」

たまらず俺が彼女の言葉を継ぐ。

「知つてゐることもなにも・・・武偵殺しは手がかりを何も残さないのよ」

手詰まりか、分かつてはいたがそう安々とシツボを掴ませてはもらえないんだな。

エリーはゴミ箱に入つてゐる紙束を見つける。何やら報告書のようだが・・・

「これバスジック事件の報告書だよね? もらつていい?」

「ええ、構わないけど手がかりになるようなことは何も書いてなかつたわよ」

「ありがとう、じゃあ私達はこれで失礼するよ」

そういうつてエリーはさつさと出口に急ぐ。

「え、もう良いの?」

困惑するアリア。

「ああ、あ・・・そうだ、貴女はどうやつて武偵殺しの出現を察知してゐのかな?」

最後にエリーはアリアに質問する。

「武偵殺しは遠隔操作で乗り物を乗つ取るの、その時の電波をキャッチしてゐるのよ」

「なるほどね、ありがとう」

そう言つて今度こそエリーは病室を後にした。

静かな病室に残された俺とアリア。

「じゃあ俺もこれで、ええと、なにか情報を掴んだ俺たちにも教えてほしい、コチラもなにかあつたらそつちに伝える」「わかつたわ」

俺はアリアと連絡先を交換しておいた。



俺たちは捜査資料にかかるであつたバスジャックのルートを走つていた。横に座るエリーは時折資料に目を落としつつ外をしきりに見回している。

「なにかわかつたか?」

「たしかに彼女が捨てるのも分かるね」

「一旦帰るか?」

「ああ、部屋に戻つてゆつくり考えたい」

俺は首都高に乗つてエリーのマンションへと向かう。

部屋に戻り彼女は例のソファに座つて考えを巡らせていた。彼女だけに見える情報の断片をパズルのように組み合わせている。

「武偵殺しは周到なヤツで痕跡を一切残していない、セグウェイやルノーにも手がかりは無し……」

ブツブツと独り言を言いながら手を動かしていく。

「唯一引っかかるのは武偵殺しの事件にはアリアが絡んでいること、それに遠山キンジも、二人は今年の春に出会つたばかりなのにいくつかの事件をすでに解決している」

「待てよ、確か彼女は武偵殺しが遠隔操作をするときに発する電波を察知して居ると言つていたか、武偵殺しはどうして毎回彼女に感づかれているにも関わらず手法を変えないんだ?」

「こういったタイプの犯罪者は事件を起こすことを楽しんでいる節がある、自分は逮捕されないという自信の現れか?」

エリーは手を左右に振つて今の仮説を払い除けた。

「いや違う、目的は彼女にあると考えるのが妥当だ。決まつてキンジをそばに置くのも仕組んでの事、不特定多数を狙つていると見せかけてターゲットはある2人だったのか」

「でもなぜ遠山キンジなんだ？待てよ……豪華客船のハイジャック事件で殉死した武偵の名前は確か遠山……そうか、そういう事か!?」ハツと目を開いて俺の方を見る、その目つきはまるで獲物を眼の前にした虎のようだった。

「武偵殺しの目的は分かった。後は犯人探しだね。早速準備に取り掛かりたいところだが頭を使いすぎて今日は疲れた。物事を成功に導く上で休息も大事だよ、キミもしつかりと休んでおくように。それに銃の手入れをしておいてくれ、キミの狙撃が必ず必要になつてくる。クルマは自由に使っていいよ、持つてきたのは良いけどあれは大きすぎたしキミのほうが色々と動く上で便利だろう?」

矢継ぎ早に伝えたエリーはそのままバタン、絨毯の上で寝てしまつた。

エヴァンゲリオンみたいなやつだな……

俺は彼女を抱えベッドまで運ぶ。お言葉に甘えてCX-75のキーを持つて俺はマンションを出た。

地下駐車場に降りて機械式駐車場からCX-75が出てくるのを待つていたときだつた。

「うわっ!?びっくりさせんなよレキ……」

俺と同じ狙撃科のレキが横に立つていた。狙撃手らしいと言うか人間らしくないと言うか、所作がいちいち無機質でよくわからないヤツだ。

「良くない風が吹いています」

そして言つていることもよくわからない。彼女のいう風とはある種の彼女の行動原理のようなものだ。

「俺にか?」

「はい、近いうちに貴方は迷います」

「確かにエリーと一緒に捜査し始めたときからなんか変なイメージが

付いてまわってるんだ。うまく言葉では表せないがな・・・」

銀行強盗事件のときにも感じたいわゆるイヤな予感つて奴だ。俺は武僧殺しの黒幕という確かに存在するだろうが実態が全くつかめない組織に対する恐怖心からくるものだろうと思つていた。

しかしレキの口ぶりからすると違うようだ。

「迷いの元はもつと身近にあると思います。貴方は今後を左右する重大な選択に迫られますそれに貴方はとても悩み、困惑するでしょう」普通の人なら胡散臭いオカルトだと一笑に付すだろうが武僧という職業柄無視することもできなかつた。

「でも自分の選択を信じてください。そして自信を持つて行動してください。では・・・」

ちょうど良いタイミングでCX-75が駐車場から出てくる。レキの姿はもうなかつた。

「全く・・・相変わらず変なヤツだぜ・・・」

そう呟いて俺はCX-75に乗り込んだ。そしてエンジンを掛けようとボタンに手を伸ばしたときだつた。

「ん?」

ふと手元に握つっていたキーに視線が向かう

E l l i e • M • W a s h i m i y a

キーホルダーに彼女のフルネームが刻印されていた。

「M・・・・アイツのミドルネームか?」

彼女はイギリスの名家の出だ、ミドルネームがあつてもおかしくないだろう。俺は特に疑問に思わずCX-75のエンジンを掛けた。近所迷惑になるんじやないかつてくらい大きくて甲高いエキゾーストノートが駐車場に響き渡る。

俺はアクセルを踏み込んでマンションを後にした。

吟味

「悩むな・・・」

俺は悩んでいた。

「おいレオ、早く決めてくれないと後ろが詰まつるんだぜ?」

「え、ああ・・・済まない」

武藤に急かされ俺はボタンを押す。下からB定食と書かれた食券が出てきた。

エリーの捜査に協力することで俺は彼女から少くない額の報酬をもらっている。いつもはラーメン一択なのに昼食のメニューを選ぶ余裕が出ててしまつた。

それに彼女から常に良いコンディションを維持するようにと言われ、栄養バランスを意識するようにもなつた。

机を囲うのは俺と車両科の武藤と強襲科の不知火、探偵科のキンジだ。

「お前最近噂になつてゐるぞ、イギリスからの転校生と付き合つてゐるらしいじゃないか?」

「!?

武藤の唐突な言葉に俺は味噌汁を吹き出しそうになる。

「な、何だよそれ・・・俺はエリーに捜査協力してるだけだ」

「ふーん、でも放課後に彼女がキミに告白してゐるところを見た人も居るらしいよ」

不知火が悪ノリしてきた。コイツめ・・・背中に気をつけておけよ・・・

「あれは彼女のイギリスンジョークだつて」

「テンパるんじゃねーよレオ、それを言うならイングリッシュジョークだろ?」

「お前がなんで女絡みの話し振るか分かつてゐるぞ、また星伽さんニアプローチして失敗したんだろう?」

「チキシヨー! それを使うのは反則だろ!」

「はい俺の勝ち~」

机に突っ伏す武藤に俺は高らかに勝利宣言をした。気にすることなけれ、いつもの馴れ合いだ。



武藤たちとの楽しいランチの後、俺は装備科棟へ向かつた。平賀文から預けていたK a r 9 8のアップグレードが完了したとの連絡を受けたからだ。

「平賀、入るぞ・・・」

「茨木君！待つてたのだ！」

ガラクタだらけの工房の奥から小さい体がガサガサと音を立てながら出てきた。少しほは整頓しろよな・・・

平賀は俺の前にガンケースを置く。

「古い銃で苦労したけどとてもやりがいのある仕事だつたのだ！開けてみるのだ」

俺はガンケースを開けて愛銃の姿を拝む。

外見で大きく目立つ変更点はフオアエンドとストックの形状変更、俺は基本シッティングポジションの構えを取るため、シャシーとストックが膝、肩、腕に密着するような形状にしてもらつた。

更にチークパッドが調節できるようにした事と20ミリレイルシステムの取り付け、ストレートボルト化した事、後は各部品の精度出し、かなり無茶のある改造だが平賀は喜んで引き受けてくれた。

「気に入つたのだ？」

「勿論！マジ最高！」

試しに構えてみたがファイットティングがハンパンない！

「そこまで言ってくれるととも嬉しいのだ。こんな大口依頼も久しうりだから弾代と申請代行手数料はサービスしとくのだ」

「ホント感謝するよ」

勿論このカスタマイズはかなり高くついた、しかしこれだけはケチつてはいけないところだ。

平賀と支払いについて相談した後その足で狙撃科棟で試射をした。

思つたとおり、満足のいく出来栄えだつた。これなら1000m級の狙撃も難なくできるだろう。

これで準備も万端。武僧殺しよ、いつでもかかつてこいだぜ！



帰り、俺はガソリンスタンドに居た。CX-75はガソリンをめつちや消費するのだ。

ハイオクのノズルを突っ込んで満タンになるのを待つているとふと向かいにあるホテルの前に止まつたシトロエンDS9が目に留まつた。

『外』と書かれた青い横長のナンバープレート、外交ナンバーだ。上2桁の数字は27、フランスの外交関係者が使用する公用車ということだ。

ホテルから2人の人影が出てくる、その中のひとりはよく知つてゐる人物だつた。

エリー！？

フォーマルな格好をした鷺宮エリーだつた。彼女は初老の外国人男性と一緒にDS9へと乗り込む。俺はさつさと支払いを済ませて例のDS9を追うこととした。

とはいえすこぶる目立つクルマ故あまり接近できない、4台の一般車を挟んで尾行を開始した。

「どうしてエリーはフランスの外交官と会つてるんだ？」

全く訳がわからぬ・・・

DS9は東京湾の埠頭がある方向へ向かう、そろそろ尾行するのもしんどくなつてきた。CX-75に乗つてゐるのを後悔してしまう。ついにエリー達の乗つてゐるDS9は人気のない倉庫街の方向へ曲がつていったために尾行を断念した。



「大丈夫かい？なにやら顔色が悪いみたいだけど・・・」

「いや、別に俺は元気だぞ？何も問題はない」

次の日、俺はエリーの部屋で捜査の報告を聞いていた。しかし内心報告どころではない。

別に彼女に昨日のことを聞こうとも思っていたのだが聞かない方が良いとも思つてしまつていて。

「だつたら良いんだけど・・・ともかく武偵殺しについて分かつたことを報告するよ。」

エリーの報告をざつくりとまとめるとまずヤツの目的は自分の存在を誇示するために事件を起こしている。手口は最初不特定多数を狙いターゲットにだけ分かる手がかりを残す。そして次のターゲットは神崎・H・アリアと遠山キンジである。

「なぜあの二人がターゲットなんだ？」

「彼女に関しては家柄が関係しているんだ。なんせ彼女の実家は、その・・・ホームズ家だからだよ」

「てことは神崎はある名探偵の末裔つて事か？」

「そういうことになるね」

マジかよ・・・

確かに彼女の病室に言つた時、神崎・H・アリアとあつた。あの『H』はホームズのHだつたのか・・・

それでエリーが彼女を訪ねたときに調子悪そうにしてたのか。確執のある家の直系の末裔に会いに行つていた訳だからな。

「家が関係していると言つていたが犯人もイギリスの名家つて事か？」

「名家という点は合つてるけどイギリスだけとは限らないよ、キミが思つて いる以上にヨーロッパは狭いんだ」

・・・まあイギリスは歴史的に色んな国にケンカ売つてきたからな。
「だつたらキンジはどうして狙われる？」

「キミだつてあの小説のことはしつつているだろう？あの探偵のそばには誰が居た？」

「ジョン・H・ワトソンだろう？ああ・・・相棒が居るつてことか？」

「そういうコト、どうして武偵殺しが遠山キンジを相棒として選んだかはわからぬけど豪華客船で兄を殺害、自転車に仕掛けた爆弾、偶然ではないだろうね」

しかしあの二人、あまり上手くいっているわけではない様子だ。神崎は一人で突っ走る癖がある、それに普段のキンジじや使い物にならないだろう。

「それでここからは私の予想だけど武偵殺しは私達にかなり近い人の中にいると思う」

「・・・もしかして生徒の中に武偵殺しが居る可能性があるということか？」

「ああ、考えてみなよ？この学園島、住人の多くは武偵校の関係者だ。そんな人達の中で白昼堂々と爆弾テロをやつて見せるんだ。外部からの犯行なら絶対誰かが気づく、教務課だって捜査してるのに一向にシッポを摑めないとということは灯台下暗しってことも十分にありえる、日本の捜査機関っていうのはそういったことに弱いからねえ」

報告を聞き終えエリーの部屋を後にする。犯人逮捕に関する詳しい作戦は情報を揃えてまた連絡することだ。

俺は首都高を走りながら考えを巡らせていた。

エリーの様子はいつもと変わらなかつた。外出した形跡も無し、俺が昨日見たのは見間違いだつたのだろうか・・・

答えは出ぬまま結局男子寮の駐車場へと到着してしまつた。

「ん？こんなクルマあつたつけか？」

俺のスペースの隣に見慣れないクルマが停まつていた。確か名前はエイキロン、フランスのジエンティオートモービル社が製造している1000馬力オーバーのモンスターカーだ。

不審に思いながらも俺は横にCX-75を駐車する。この区画だけまるで高級ホテルのようだ。

俺がクルマから降りると隣のエイキロンのシザーズドアが開く。中からスーツを着たキレイな外国人女性が出てきた。

「貴方が茨木レオ君？」

流暢な日本語で俺に話しかけてきた。

「そ、うだ、が？ アンタ何者？」

「リディアーヌ・シユヴアリエです。よろしく」

リディアーヌと名乗った彼女は懐から名刺を取り出して俺に差し出した。フランス語で色々と書いてあるが唯一分かった文字がある。
D i r e c t o r i e d u R e n s e i g n e m e n t i n t r i e u r
G S I フランス国内情報中央局、日本で言う国家安全保障局、アメリカだとCIAに準ずる組織だ。

「フランスの情報機関が俺に何の用だ？」

俺はフランスに渡航経験も無いしフランスの機関に目をつけられる心当たりが全く無いのだ。

リディアーヌさんから見せられた写真を見て俺は驚愕した。暗い所で撮つたものだろう、画像を処理して明るさを上げてているため少し荒いが俺が昨日見た初老の外国人とエリーがはつきりと写っている。「鷺宮エリーについて聞きたことがあるの」